

# 公益財団法人環日本海環境協力センター 日本海版「海の学び」プログラムの提案

実施期間：平成30年4月28日（土）～平成31年3月31日（日）



## 【事業の内容・目的】

- 海洋生物多様性保全関係機関ネットワークが有する海洋教育のノウハウを生かし、各地で海洋教育を実践する機会とした
- 本ネットワークが日本海の北から南まで広域をカバーする特徴を生かし、日本海特有の海洋教育や、海洋教育の地域特性、地域間差を把握することを目指した活動を行った
- 各施設での実践結果、地域間比較結果を踏まえ、日本海版「海の学び」プログラムとしてまとめ、WEB等を通じて広く発信する体制の構築を目指した

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等ではできません。

## 活動の様子

### 1. 海洋教育プログラムの実践

【開催日時】平成30年4月28日（土）～10月20日（土）

【開催場所】むつ市海と森ふれあい体験館、魚津水族館、環日本海環境協力センター、のと海洋ふれあいセンター、福井県海浜自然センター、下関市立しものせき水族館海響館

【参加者数】 1,450 人

【活動内容・目的】

- 市民、子供たちが海について学び、海に親しみ、海を身近に感じるための海洋教育プログラムを日本海各地で実践した。
- 海洋教育プログラムの実践にあたっては、水族館やセンターが有する経験を活かし、参加者がより効果的に海について学ぶことができるよう、複数のプログラムを組み合わせたり、環境が異なる海岸で開催したり工夫を施した。
- 地域の特徴的な生物や、地元の人々に馴染みのある生物を対象とするプログラムを提供することで、参加者の関心をより高めるよう努めた。



富山県雨晴海岸における  
生き物観察会



魚津水族館学芸員による  
解説の様子



解説を記録する参加者の様子



富山県岩瀬浜で実施した  
スナガニ調査の様子

海洋生物多様性保全関係機関ネットワーク参加団体では、地元の子供たちや市民に海について理解を深めてもらうことを目的に様々な海洋教育プログラムを提供している。海洋教育プログラムの提供にあたっては、単に観察だけで終わらせるのではなく、解剖などより深い学習機会を提供するとともに、利用した生物を調理し食べるなどの食育とも結びつけるような工夫が盛り込まれている。また地元の特徴的な生物を対象にするなど、地元の人々が関心を持ちやすいよう工夫されている。

これら機関が有するノウハウを、新たな日本海版「海の学び」プログラムの検討に役立てた。

### 【参加者の声】

○回答内容A（海の学びに繋がるもの）

生物がいっぱいいいてビックリした。普段は気が付かない。

○回答内容B（海の学びに繋がるもの）

海といえば泳ぎに行くイメージでしたが、生き物と共存していることを感じ、さらに大切にしたいと思いました。

○回答内容C（海の学びに繋がるもの）

私たち次第で環境が変わってくるので、これからもっと意識していきたいと思った。

## 2. 日本海版「海の学び」プログラムの提案

【開催日時】平成30年11月13日（火）、14日（水）

【開催場所】むつ市海と森ふれあい体験館

【参加者数】25人

【活動内容・目的】

- 1の海洋教育プログラムの実践で、各地で実施された海洋教育プログラムの成果を共有するためワークショップを開催した。
- 日本海における海洋教育の特徴や地域特性を把握し、日本海版「海の学び」プログラムの構成や、紹介すべき海洋教育事例を検討した。
- ワークショップで挙げられた意見を踏まえ、屋内外で実施する14の海洋教育事例を紹介する日本海版「海の学び」プログラムを作成した。
- 日本海版「海の学び」プログラムを広く発信するとともに、海洋生物多様性保全関係機関ネットワークの活動を紹介するためのウェブサイトを新たに開設した。[\(https://www.jsbionetwork.jp/\)](https://www.jsbionetwork.jp/)



日本海海洋教育ワークショップを開催したむつ市海と森ふれあい体験館



日本海海洋教育ワークショップ開催の様子



むつ市海と森ふれあい体験館  
五十嵐館長の発表



むつ市立脇野沢小学校児童たち  
の発表の様子

日本海版「海の学び」プログラムを検討するため、日本海海洋教育ワークショップを平成30年11月13日、14日にむつ市海と森ふれあい体験館で開催した。青森県、富山県、石川県、福井県での海洋教育の実践結果を共有し、日本海における海洋教育の特徴について検討した。例えば、対象とする生物も、青森県では陸奥湾に生息するカマイルカを、富山県ではスナガニ、石川県ではアカテガニと異なる。それぞれの地域の特徴的な生物を対象とすることで、地域の人々の興味や関心が深まる効果が得られる。日本海各地で実施した海洋教育を参考とし、日本海側の更に多くの地域で海洋教育が盛んに行われるよう、日本海版「海の学び」プログラムを提案した。



海洋教育プログラムで紹介した  
スナガニ調査の事例



海洋教育プログラムで紹介  
した海藻アートの事例

※新規作成ウェブサイト上で公開した各種海洋教育プログラム（14プログラム）  
（ <https://www.isbionetwork.jp/> ）

屋外の プログラム	観察	磯観察
		ビーチコーミング
	調査	スナガニ調査
		ドルフィンウォッチング
		海岸漂着物（海洋ごみ）調査
	体験	塩づくり
		スノーケリング
地引網・定置網		
釣り		
屋内の プログラム	体験	海の生き物の解剖実験
		チリメンモンスター
		ナイトアクアリウム
	制作	海藻アート
		ビーチクラフト

## 【事業全体のまとめ】

日本海側は太平洋側に比べ、市民が海と触れ合える場が限られているほか、冬季には海況が悪化するなど、海洋教育を実施する際にいろいろな制限がある。そのため、海洋教育を体験できる施設やそういったプログラムを提供する組織が、地域における海洋教育の展開・発展に大いに貢献している。特に、本事業に協力いただいた機関で取り組まれている海洋教育は様々な工夫が施されており、参加者の満足度は非常に高く、多くの子供たちや市民が海について学ぶことのできる貴重な機会となっている。このようなノウハウを活用し、更に多くの地域で提供できるようにすることで、多くの人々に海について興味を持ってもらえるようになることが期待される。

このような観点で、本事業に参加した機関が有するノウハウを集結し、日本海版「海の学び」プログラムを提案できたことは、今後の日本海側の海洋教育の更なる発展に大きく寄与するものと考えられる。

## 主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. むつ市海と森ふれあい体験館	海洋教育の実践、海の学びプログラムの検討
2. 魚津水族館	海洋教育の実践、海の学びプログラムの検討
3. のと海洋ふれあいセンター	海洋教育の実践、海の学びプログラムの検討
4. 福井県海浜自然センター	海洋教育の実践、海の学びプログラムの検討
5. 下関市立しものせき水族館海響館	海洋教育の実践、海の学びプログラムの検討

## 主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. ウェブサイト	海洋生物多様性保全関係機関ネットワークウェブサイト（平成31年3月）
2. 新聞（読売新聞）	「陸奥湾のイルカ 研究発表」（平成30年11月14日）
3. 新聞（東奥日報）	「イルカ研究の成果 堂々」（平成30年11月14日）
4.	
5.	

以上